

# 学習院アーカイブズ ニューズレター

Gakushuin Archives Newsletter 2022.7.15 vol.

20



## 歩道橋から見る目白キャンパス西門 1978(昭和53)年10月

1963(昭和38)年に設けられた西門は通用門とも称され、現在の場所よりも奥まった、装いもシンプルなものであった。この後何度か改修が行われ、現在の姿になったのは2002(平成14)年のことである。これは、目白駅周辺整備計画に基づき整備された目白駅舎や駅前広場の環境に合わせて、西門、守衛所の改築および周辺整備を実施したことによる。駅前に存在した歩道橋から撮影されているが、この歩道橋はすでに姿を消しているため、今ではこの位置から西門を眺めることはできない。(学習院アーカイブズ所蔵)

## Contents

|   |   |
|---|---|
| 学習院アーカイブズ所蔵史料の活用について —学習院大学史料館春季特別展を例として<br>学習院大学史料館 助教 谷嶋美和乃 | 2 |
| 学習院アーカイブズ所蔵の写真資料 —「少し前」の歴史を伝える—<br>学習院アーカイブズ 桑尾光太郎            | 4 |
| 乃木希典の遺品、紹介 —保管の変遷を添えて<br>学習院アーカイブズ 小根山美鈴                      | 6 |
| 主な活動(2022年2月～2022年6月)   | 8 |

# 学習院アーカイブズ所蔵史料の活用について

## — 学習院大学史料館春季特別展を例として

学習院大学史料館 助教 谷嶋美和乃

今春、学習院大学史料館にて、四谷区尾張町に校舎があった頃の学習院を紹介する展覧会「揺籃期の学習院—四谷校地のころ—」を開催した。幕末の京都に淵源をもつ学習院は、1877（明治10）年神田錦町に開校したのち、現在の目白にキャンパスを構えるまでに虎ノ門、四谷と校地を移転している。当館ではこれまで「幕末京都の学習院」（2016年）、「黎明期の学習院—神田・虎ノ門のころ—」（2017年）、「学び舎の乃木希典」（2018年）と各校地に焦点をあてた展覧会を開催してきたが、今年は残る四谷時代の学習院をとりあげることとなった。

1890（明治23）年に虎ノ門から移転した四谷校地には、明宮嘉仁親王（のちの大正天皇）をはじめ、多くの皇族や、のちに『白樺』同人として活躍する人物らが通い、学生生活を送っている。移転時に第4代院長を務めていた三浦梧楼は「学習院学則」を制定し、四谷校地にて新たな教育がスタートした。華族子弟への教育が重視され、将来貴族院議員や陸海軍の武官になる素地をつくるよう、特に道徳や武課（体育）教育が徹底され、『初学教本』など学習院独自の教科書が作られていった。そして第7代の近衛篤磨院長も就任直後から学習院改革に取り組み、今度は外交官養成に尽力していくこととなった。また、現在にも続く校友会組織「学習院輔仁会」の活動が盛んになったのもこの頃で、『輔仁会雑誌』には志賀直哉、武者小路実篤らの文芸作品が数多く掲載されている。

こうした四谷時代について、学習院の特色である武課教育に関しては「学習院とスポーツ」

（2021年）にてとりあげたため、今回の展覧会は主に文化的な面に注目し、四谷時代の校地、教育、学生生活をテーマに、展示品に悩みながらも当館所蔵の史料のほか、学習院アーカイブズや学習院大学図書館からも史料を借用して学習院の歴史を紹介した。

以下、その展覧会の一部を振り返りつつ、アーカイブズより借用した史料の展示活用例を紹介していきたい。

### 四谷校地関係

「四谷校地へ」と題した第1章では、当時の校地を紹介し、関連史料や年表を展示した。四谷の本館校舎は現在の迎賓館赤坂離宮前休憩所のあたりに新築され、あまり知られていないが、現在の国立科学博物館のあたりには初等学科生のための上野分校も設置されていた。ここではアーカイブズから、立派な洋風建築の本館や、寄宿舍の外観、上野分校に通

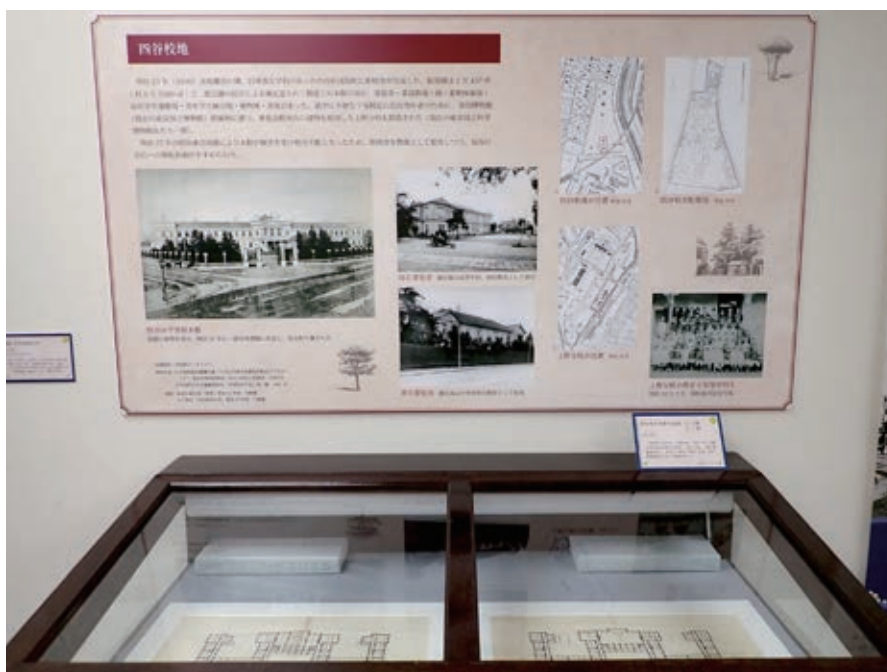


図1 四谷校地紹介パネルと本館平面図の展示風景



ていた初等学科生の集合写真のデジタルデータを借用し、校地を紹介するパネルに使用した（図1）。スナップ写真のようなものがなく、教室内の授業や学生たちの様子を伝えることはできなかったが、校舎の外観だけでもビジュアルで示すことは重要であり、少しでも当時の雰囲気伝えられたのではないかと思う。

また、そのパネルの下の木製ケースに展示した本館1階2階の平面図もアーカイブズより借用したものである。この平面図は、『開校五十年記念 学習院史』（1928年）所載の版下で、「皇太子殿下御休憩所」「皇太子殿下供奉控所」という学習院ならではの部屋が記されるほか、各学年の教室、理化学・習字・唱歌・図画教室や博物室など様々な教課の教室も確認することができ、当時どのような教育が行われていたかがわかる1点であった。

### 近衛院長の意見書

続いて第2章「揺籃期の教育」では、四谷時代の歴代院長7名のなかから、先にあげた三浦と近衛の2名の院長下における教育について紹介した。前半のコーナーでは、学則にまつわる史料や、道德教育の要素をおりこんだ『初学教本』をはじめ、外国語・図画・習字などの学習院が独自に編纂した教科書を<sup>1)</sup>、後半は当時活躍した教授、白鳥庫吉や萩野由之らに関連する書籍のほか、近衛院長に関わるものとして当時図書館に寄託されていた陽明文庫を保管する木箱や、教育課程を改正するための意見書を展示した。

近衛院長は、外交官養成に力を尽くすべく、欧文課の授業を増やすなど大学科（高等学科修了後、さらに専門的な学術を修めるために設けられた科）や高等学科の教育課程を改正し、教員養成のために教授らをヨーロッパに留学させるなどしている。意見書はアーカイブズより借用した『例規録』（自明治廿六年至同三十年）の1896（明治29）年第十一号「学習院学制中大学科及高等学科ノ課目修正御裁可ノ旨大臣ヨリ達ノ件」に掲載されているもので<sup>2)</sup>、学制改革において外交官養成を一つの目標とすべきことが記されている。文章は8ページにわたっているため、史料はページを替えて展示しつつ、全頁をパネルで提示する形をとった（図2）。

以上、展示した史料について記してきたが、このほかにも学習院の公式的な情報が記された『重要雑録』、『式事録』、『学習院年報』、『学習院一覽』など



図2 『例規録』展示風景

を下調べのために閲覧し、四谷関連の年表や『白樺』同人らの入学卒業年を記した表の作成に活用しており、アーカイブズには様々な形でご協力いただいた展覧会となった。

アーカイブズには学習院の歴史をとりあげる際にはかかせない情報・史料が多く残されている。こうした展覧会が、個人ではなかなか見る機会のない貴重な史料たちの、さらなる活用や研究につながる契機となれば幸いである。

1) 当時の外国語教科書については、小根山美鈴「明治期、学習院が独自の外国語教科書で学ばせたかったもの」『学習院アーカイブズニューズレター』vol.17（2021年）に詳しい。  
2) この意見書は『近衛篤磨日記（付属文書）』（近衛篤磨日記刊行会編、鹿島研究所出版会、昭和44年）に「学習院制度改革意見」として活字化されている。

# 学習院アーカイブズ所蔵の写真資料

— 「少し前」の歴史を伝える —

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

学習院を記録した写真は、各時代のキャンパスや人物などを示す歴史資料として、刊行物への掲載や広報・展示に利用される機会が多い。学習院アーカイブズには、点数が未だに把握されていないが数多くの写真が保管されている。撮影年代はおおよそ明治10年代から2010年代まで、形態も台紙に貼り付けられた大判の古写真をはじめ、さまざまなサイズの紙焼き、ネガフィルムやポジフィルム、CD、DVD等に収録されたデジタル画像など多種多様である。1915（大正4）年の学習院の姿を伝える写真帖『大礼奉獻学習院写真』や、卒業アルバム等の刊行物も参照頻度が高い。以下、アーカイブズ所蔵写真の概要と、フィルムのデジタル化作業について紹介する。

## 1. 写真資料の概要

学習院アーカイブズに写真が集まってくる主な機会は、これまで幾度か行われた年史刊行物の編纂だった。1963（昭和38）年に創立八十五周年を記念して発行された図説『学習院のあゆみ』の編纂過程で写真の収集が行われており、さらに1970年代から80年代にかけての学習院百年史編纂事業において、広範囲に写真が収集・整理されるとともに、年代や学校別に紙焼きを収納したアルバムにまとめられた。卒業生ほか学校関係者から提供された写真も数多い。その成果は『学習院の百年』（1978年）、『学習院百年史』（1980～86年）に使用されるとともに、写真アルバムは現在も問い合わせ等に対応するため頻繁に参照されている。

その後の学習院大学五十年史編纂事業（1994～2001年）では、大学開学が1949（昭和24）年ということもあって「戦後の学習院大学」の写真が調査収集の対象となった。その際に収集された写真も、紙焼きやフィルムがアルバムにまとめられて保存され、図録『学習院大学の50年』（1999年）に掲載された写真を中心にしばしば参照される。図1は当時

総務部倉庫から移管された資料に含まれていた写真で、1948（昭和23）年頃の旧制高等科学生と思われるが、日常のキャンパス風景や学生生活を記録したスナップが興味深い歴史資料となる一例である。大学五十年史編纂時には『学習院広報』（1972年創刊）用に撮影された写真アルバム、大学案内や卒業アルバム制作の際に撮影されたフィルムなど大量の写真が移管された。その一部は『学習院大学の50年』に使用されたが、学内業務で撮影された写真やフィルムは点数が膨大で、使用のあり方も目的にかなった写真を探し出している「つまみ食い」程度だったため、フィルム群は未整理のままとなった。



図1：旧制高等科学生（1948年頃）

戸山の女子大学では『半世紀 学習院女子短期大学史 図録』（2000年）、女子中・高等科では『学習院女子中・高等科100年史』（1985年）・『学習院女子中等科 女子高等科125年史』（2010年）の編纂を機に、写真の収集・整理が進められた。とくに女子中・高等科史料室には、学習院女学部・女子学習院（1906～1947）時代の大判の古写真（図2）が多数残されていた。女子学習院は1945（昭和20）年5月の空襲





図2：女子中高等科所蔵古写真

で青山にあった校舎をほぼ全焼しており、残されている古写真は戦後に卒業生や教員、あるいはその遺族から寄贈されたものが大部分のはずだ。写真に限らないが、寄贈された資料から卒業生と学校との深い絆を感じることができる。また幼稚園では『がくしゅういんようちえん 再開園50周年記念誌』（2013）年の編纂を機に、1963年の開園以来撮影されてきた写真フィルムのデジタル化が行われた。四谷の初等科でも所蔵資料調査の過程で戦前から戦後にかけての写真が確認されており、今後整理とデジタル化が求められる。

## 2. デジタル化への転換と今後

2000年代に入って、フィルムカメラからデジタルカメラへの移行が始まった。筆者は2003年から2006年まで他大学で年史編纂に携わった際、フィルムカメラとデジタルカメラを併用し、デジタルカメラでは高精細な画像撮影がまだ難しかったと記憶している。デジタルカメラをはじめ機材の進化と普及は急速に進み、2000年代後半からフィルムや紙焼きが作成・保存される機会は急速に少なくなっていく。

2011年に学習院アーカイブズが発足したのち、各部署から写真や画像データが移管され、卒業生ほか学外関係者からも写真の寄贈もしくはその複製の提供を受けてきた。そして2027年に学習院創立150周年を迎えるにあたり、記念事業の一環として写真等で学習院のあゆみをつたえる記念誌を編纂刊行することとなった。記念誌では学習院百年史編纂が行われた後の、1970年代から2020年代までの時期を中心に学習院全体の動向を紹介する予定である。学習院

アーカイブズでは関係の資料や写真を収集する基礎作業を進めている。

作業のひとつとして、これまで未着手だった大学案内や広報用に撮影されたポジフィルムの整理とデジタル化を実施してきた。ニューズレター18号以降の巻頭に掲載された写真も、そうして蘇った一部である。ポジフィルムは印刷刊行物にカラー写真が掲載されはじめた1970年代から2000年代半ばにかけて専門のカメラマンによって撮影され、被写体や用途に応じて35ミリ・ブローニー・4×5インチといったフィルムが使用されている。歴史的に貴重な情報を含むとともに、褪色劣化が進みやすいため速やかなデジタル化が求められる一方で、フィルム点数が膨大なことと、撮影の年代・場所・被写体の人物等の情報が不明のフィルムが多いこともあり、デジタル化するフィルムの抽出と考証には難しさがともなった。とくにフィルムの表裏の判断が困難で、図3のようにデジタル化を行った後に、表裏を逆にスキャンし反転していたことが発覚した失敗も多かった。

筆者は1980年代から90年代にかけて学習院大学に在学しており、見慣れたキャンパス風景や同世代の学生がやや色褪せたポジフィルムに登場すると、自分が体感した「少し前」のことも歴史の一部と化してゆくようで複雑な思いがする。しかし図3のピラミッド校舎は当たり前のようにキャンパスのシンボルとして威容を誇っていたが、2008年に取り壊されその存在を知る学生はほぼいなくなった。筆者が「少し前」と感じていても、後世の人々にとっては興味深い歴史資料となる可能性はある。日常の風景の記録を残し伝えることも、アーカイブズの大切な役割と作業を通じて考えている。



図3：ポジフィルムを反転してデジタル化した事例  
（大学東2号館とピラミッド校舎、1990年代）

# 乃木希典の遺品、紹介 —保管の変遷を添えて

学習院アーカイブズ 小根山 美鈴

## 1. はじめに

陸軍大将乃木希典は、1907(明治40)年1月31日から1912(大正元)年9月13日に没するまでの間、第10代学習院長を務めた。学習院が乃木の遺品を受け入れて110年、その保管を巡る動きは度重なる変更の連続だった。学習院アーカイブズでは、前身の院史資料室時代からこれらの資料群を引き継いでいる。

本稿では、複雑な背景をもつ乃木の資料群をダイジェストで紹介する。筆者にとって難題への挑戦である。

## 2. 学習院アーカイブズ所蔵資料

### (1) 資料群の全体像

まず、当室所蔵の乃木関係資料群は、由来別に主に下記3種で構成されている。総数約360点である。

#### ① 遺品類：約250点

メインの資料群。乃木の遺言に基づき、学習院が受け入れた資料群の一部。明治10年代初めから明治45年までに乃木が作成・収受した書類、雑誌、物品など。また、乃木が寄宿舎の学生と共に起居していた総寮部の一室(現在の乃木館)で使用した遺留品や備品も含まれる。

#### ② 編纂資料：約90点

『乃木院長記念写真帖』や『乃木院長記念録』



図1. 行軍日誌。下段は学習院職員が乃木自筆の書類を再編綴し、展示等に供したものと考えられる。

編纂時<sup>1)</sup>に作成されたガラス乾板、紙焼き写真のほか、予定していた出版物のために作成された翻刻原稿のまとめり。

#### ③ 寄贈資料：19点

個人からの寄贈が主であり、多くは乃木自筆の軸物や胸像などである。大正期から近年までの幅広い年代において寄贈がなされている。

### (2) 「遺品類」の内訳

次に、①の内容を時系列で紹介したい。まず、明治10年代の歩兵第一連隊長時代の資料であり、各隊の行軍日誌や演習時の成績表、行軍中の患者表などからなる。指揮官として隊員を錬成・管理するための記録といえる(図1)。また、陸軍少将時代のドイツ留学時講義ノートや、ドイツ語・フランス語学習のためのノートが数冊残されている。いずれも隊列や軍隊用語が中心である。陸軍大将時代の軍服も遺されている。乃木が学習院長時代にも着用していた軍服であろうか。一方、静子夫人の小遣い帳や保典(次男)のノートなども数点存在する。

次に、学習院長時代の資料は雑誌や書、皇室下賜品等のほか、特筆すべきは1911(明治44)年、乃木が東伏見宮殿下の随行員として渡欧中に学習院初等学科へ送った絵葉書がある(図2)。計9枚のうち、



図2. 初等科へ宛てた乃木自筆の絵葉書。中央は絵葉書が入っていた茶封筒。



乃木は図中赤い枠を付した絵葉書の末文に、「殿下其他諸生ノ勇健勉学ヲ祈ル」と記している。この頃初等学科学生だった裕仁親王（のちの昭和天皇）を始めとする生徒たちへのエールをしたためたものであり、教育者としての一面を覗かせる。

他方、筆やスリッパ、眼鏡、耳かき、洗面器、やかんなど、実際に乃木が使用した物品類も多い。これらは親しみが湧くものである。

### 3. 度重なる保管転換の110年

#### (1) 遺品の受入と保管転換

実は、当室所蔵の遺品類は学習院が受け入れた遺品全てではない。遺品の全体像を解明するための一助となるのが、当室所蔵の資料2種である。1つ目は「雑件録」<sup>2)</sup> (学習院庶務課) である。2つ目は、受入後に保管を担当した庶務課や図書課、訓育部（総寮部の後身）が個別に作成した管理記録の計6冊である。

「雑件録」によると(表1)、乃木の遺言により、遺言執行者塚田清市、親族総代の玉木正之が複数回にわたって学習院へ資料を寄贈している。初出は図書受入から始まった<sup>3)</sup> (番号1)。1913 (大正2) 年2月、まとまった数の物品類の寄贈を契機に、同年3月、学習院は会計課・監務課・図書課・総寮部・地理歴史課宛に、各課で保管する物品類を規定した(番号2-2)。

| 番号  | 資料名              | 件名(カッコ内は決裁年月日)                    |
|-----|------------------|-----------------------------------|
| 1   | 雑件録<br>明治45-大正元年 | 故乃木大将遺言ニ依り図書受領ノ件<br>(1912年10月22日) |
| 2-1 | 雑件録 大正2年         | 乃木伯爵家親戚ヨリ乗馬寄贈ノ件<br>(1913年1月20日)   |
| 2-2 |                  | 故乃木学習院長遺物保管方規定ノ件<br>(1913年3月4日)   |
| 2-3 |                  | 故乃木院長遺物中職員へ書物分配ノ件<br>(1913年6月30日) |
| 3   | 雑件録 大正4年         | 乃木院長遺品保管替ノ件<br>(1915年2月9日)        |
| 4   | 雑件録 大正6年         | 乃木院長遺品女学部へ保管転換ノ件<br>(1916年10月9日)  |
| 5   | 雑件録 大正8年         | 乃木院長遺品保管転換ノ件<br>(1919年5月20日)      |

表1. 「雑件録」より件名抜粋 (大正期前半)

その後、度重なる保管転換や分配が続いた。それは学習院全体に乃木の「形見分け」が行われた一方で、まとまった分については、保管先を図書館と総寮部に徐々に集約されるようになる。その後、総寮部側（いわゆる「記念室」）の資料群の管理を庶務課が担うことになった。これが、現在の学習院アーカイブズ所蔵分の大半を占める。

#### (2) 保管転換の先に

最終的に院史資料室にこれらの資料群が移管されたのは、1994 (平成6) 年9月のことである。同室では1991 (平成3) 年8月に所在調査を行っている。「乃木院長遺品仮目録」の冒頭記述によると、終戦後まもなく、記念室の資料を西1号館地階に移し、その後、図書館書庫（現在の北別館に併設されていた）、総務部倉庫(1963年)、大学図書館倉庫(1968年)と点々とし、院史資料室に移管される運びになったとのことである。一時期は図書館と記念室の資料群とが共存していたことになる。事実、当室の資料群の一部には図書館ラベルが貼付されているものもある。

#### 4. おわりに

大正期から戦前にかけて、学習院は毎年9月13日を故乃木院長祭日とし、図書館及び記念室に遺品を陳列し、学生や父兄が参観する機会を設けていた模様である。記念室は生前の乃木の居室であるかのように整えられており、外部の人々の拝観や見学にも対応していた。まさに、乃木の息遣いを感じる空間だったのでらう(図3)。

現在、学習院アーカイブズでは来年度から始まる事務室改修工事に向けて、一時的に所蔵資料を外部倉庫へ預けるための準備に勤しんでいる。今後の課題は、資料の手入れや適切な保存措置、そして系統的な資料整理を行うことが必要である。欲を言えば、院内における現存状況も調べてみたいと思っている。



図3. 乃木院長寓居室(上段)、乃木院長寝室(下段)  
〔『大札奉獻学習院写真』1915(大正4)年11月〕

1) 学習院輔仁会編纂。『乃木院長写真記念帖』(審美院、1913年)、  
『乃木院長記念録』(三光堂、1914年)  
2) 当室では、明治42年～平成2年度分、計79点を保存している。  
3) 「乃木院長遺品ニ関スル書類」(学習院図書課)によると、  
寄贈図書分は607冊だったようである(筆者の算出による)。

## 主な活動（2022年2月～2022年6月）

### ◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別（5部署（重複、事務部門以外含む））

### ◆所蔵資料の整理・保存

- ①移管文書の選別・整理・目録作成
- ②学内刊行物、書籍
- ③自動演奏ピアノの維持管理
- ④劣化資料に対する保存修復



明治・戦前期の公文書簿冊の保存箱作成

### ◆資料等のデジタル化

- ①広報課移管ポジフィルム
- ②女子大学移管ポジフィルム
- ③『学習院広報』第1号～第63号



中・高等科西洋画教室（1992年）

中・高等科本館（1978年竣工・1997年に取り壊し）5階に置かれていた



女子高等科数学演習（1992年）

数学実習室が女子部B館2階に設置されていた。

### ◆資料受入れ

- ①学習院御馬車舎新築工事仕様書（大正4年）
- ②教職員テニス部アルバム
- ③職員親睦行事記録（昭和30年代～）

### ◆講演会、教育・広報支援等

- ①『学生生活の手引』、大学案内パンフレット等への編集協力
- ②新任職員研修「学習院の成り立ち」（4月2日）
- ③大学史料館展覧会「揺籃期の学習院－四谷校地時代のころ」（3月28日～6月3日）への協力
- ④文学部史学科専門科目「アーカイブズ学演習」への協力

### ～目白キャンパス西門こぼれ話－表紙の写真より～

当時の通用門は午後7時閉門。クラブ活動で帰宅が遅くなった学生が目白駅に向かう際、近道として通用門を乗り越える、通称「柵越え」が行われていた。この危険かつ学習院の品位を損ねる「柵越え」対策として、1981（昭和56）年の夏季休暇期間中、柵上に有刺鉄線が張られたことがあった模様。翌年には通用門の高さ自体を上げ、更に門扉の先端を尖らせるなどの対策が取られるなど、西門は時代と共にその姿を変貌させている。

学習院アーカイブズ・ニュースレター第20号  
2022（令和4）年7月15日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ  
Gakushuin Archives

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1  
TEL 03-5992-1285（直通）

事務室 西5号館（本部棟）地下1階

<https://www.gakushuin.ac.jp/houjin/archives/index.html>